

■序：

私は、2020年のダイヤモンドプリンセス事件の頃からずっとメディア報道を観ていて「何かおかしい」と感じ続けてきました。何かに騙されているという印象がありまして。このため、インターネット上を渉猟して歩き、有意義と判断できる情報を見つけては、その情報の発信者を探り、少ないですが信頼できそうな何人かの医師・ウイルス学者・感染症学者に辿り着き、なるほどと納得できたことがあります。そのことを仲間内の勉強会メンバーに展開し続け、議論してきました。

さて、ここでは過去2年間のコロナ騒動を振り返り真つ当な情報に基づいた説明を記述した啓蒙書を紹介致します。

■書名「新型コロナ騒動の正しい終わらせ方」2021年12月10日 方丈社

■著者：井上正康、松田学

井上正康氏は船医としての臨床医経験もある感染症医学者。大阪市立大学名誉教授。インターネット上において、コロナ騒動に関する所論を披歴し、日本における過剰対応の過ちをかなり前から指摘している。本書では、数多ある関連医学論文の示す重要データに依拠して、感染症としてのCOVID-19（新型コロナ）を様々な角度から解剖し、妥当な認識を提示している。政府・厚生省の施策の不適切を糾弾し、誤った判断によって国民が無駄な犠牲を払ってきたことを明言している。松田氏は衆議院議員経験もあるメディアエーター。様々な分野のオピニオンリーダー（政治・経済・社会・医療の不合理や不正を暴く人々）との対談を発信する。

■要点：

- 1)人類史は、様々な感染症との共存の歴史であり、今回は130年前に流行ったロシア風邪に端を発するコロナウイルス風邪（私たちが俗にいう”風邪”）のカテゴリーに加わった5番目のコロナ風邪の新種に過ぎない。
- 2)インフルエンザウイルスでは、毎年2月頃をピークに合計1000-2000万人くらいが罹り、40°Cを超える高熱を発し、5000人位が亡くなっている。関連死を入れれば1万人以上が亡くなる。亡くなるのは高齢者と子供。
- 3)新型コロナ関連の死者数は2020年の一年間で3500人、どう見積もっていてもインフルエンザ並み以下の風邪でしかない。

4)感染経路：

- ①メディアが報じる飛沫感染・空気感染は皆無ではないが、主要因ではない。
- ②新型コロナの感染は主に糞口感染によるもので、感染経路はノロウイルスに似ている。（これと関連してマスクが無効であることを証明した論文も出ています。）
- ③コロナのスパイク蛋白が細胞表面のACE-2蛋白に結合することで感染が開始する。
- ④ACE-2タンパクは体中に存在するが、腸の細胞表面に最も多い。腸に次いで多いのが心臓。このため心筋症で亡くなる事例も多い。
- ⑤腸内細胞で増殖したウイルスが血中に取り込まれて感染するが、感染者の便中にウイルスが大量に出る。
- ⑥このためトイレ起源の感染が感染経路の主体である。
- ⑦従って、感染対策はトイレでの接触感染を主体とすべきであった。
- ⑧飛沫感染はゼロではないが、感染力のある感染者と面と向かって長時間対話するようなことが無い限り感染しない。その確率は低い。（因みに感染者5人のうち1人しか人に移す力はない。）
- ⑨マスクは、感染力ある感染者が着用すると多少効果があるが、他はほとんど無効。
- ⑩富岳を使った気流シミュレーションによって飛沫感染・空気感染の危険を煽ったのは無意味。
- ⑪日本の感染症研究者・医師はほとんどインフルエンザの専門家であるために上記のよ

うな間違った対処が蔓延った。

5)新型コロナの病態：

- ①当初指摘された肺炎はその本質ではなく、血栓症が本質である。このことは 2020 早期に解明されている。
- ②新型コロナの病態はスパイクによる血栓症である。
- ③コロナのスパイク蛋白自体が、血管表皮細胞の ACE-2 に結合して血管内皮細胞を損傷し血栓を発生させる。
- ④つまりコロナのスパイクは血栓を誘発する毒蛋白である。(これが衝撃的事実。)
- ⑤新型コロナに感染した人は、その人の体質によって種々の症状を呈するが、肺に血栓が集積した場合には肺炎となる。

6)PCR 検査を感染症の判定に使ったことの違い。

- ①PCR は、ウイルスの持つ 3 万塩基の RNA の内の 100 塩基(全体の 300 分の一)ほどの塩基配列を DNA に逆転写して増幅する方法で検出する。ウイルスそのものを直接検出するわけではない。ウイルス遺伝子の僅か一部の存在を検出しているにすぎない。
- ②ウイルス遺伝子の増幅回数を増やせば感度は上がるが、ノイズが増えて精度は落ちる。増幅回数 20 回以下では、感染力のあるウイルスが唾液内に存在する。が、増幅回数 40-45 では感染力のない遺伝子のかけらが大部分。WHO の勧告では増幅回数 35 以下にすべきとしている。厚生省の規定する増幅回数 40-45 回では、余計な雑音まで拾い、擬陽性者を大量に出している。
- ③感染そのものを直視してはいない。PCR 検査の結果「陽性」または「陰性」の判定は出来るが、現在まで行われている「PCR 陽性」=「感染」という判定は成立しない。(感染症判定の伝統的鉄則を破る暴挙。)
- ④PCR では、感染力のあるウイルスのみならず、壊れかけたウイルスや RNA の断片でも陽性となるので。(つまり擬陽性が相当発生する。これは情報として over-kill となる。)
- ⑤さらに、コロナウイルスは 2 週間に 1 回の頻度で変異する。変異は RNA のどの位置で起こるか分からない。このため、PCR 陽性判定に用いる RNA 配列にいつ狂いが生じてもおかしくない。時が経つと PCR 検査で何を見ているのか分からなくなる。
- ⑥PCR 発明者であるキャリー・マリス博士(PCR の発明で 1993 年ノーベル賞)は「PCR 検査を感染症診断に使ってはいけない。」との遺言を残して 2019 年に亡くなった。

7)指定感染症問題：

- ①新型コロナは、凶悪なエボラウイルス並みの「第 2 類」に指定されていることが大間違い。
- ②インフルエンザと同レベルの「第 5 類」に速やかに下げるべき。
- ③こうするだけで、騒動の大半が解消する。社会活動が元に戻る。病院での無駄な隔離や人の動線制御が解除され、医療現場も正常化する。緊急治療の必要な患者を後回しにする愚挙も起こらない。
- ④間違いを認めない厚労省の弊害が大きい。

8)ワクチン問題：

- ①長期副作用が未確認の「遺伝子薬品」を何十億人にも接種する壮大な人体実験を実行してしまった。今後起こり得る様々な副作用の害が懸念される。
- ②ワクチン接種の優等生であったイスラエルでは、2 回接種者でいち早く「ブレイクスルー感染」が起り、ワクチンの有効性に疑義が発生し問題となった。それにもかかわらずイスラエルでは 3 回目ワクチン接種を実行した結果、今度は強い副作用を発して亡くなる人も多発。世界に先駆けて提案された「ワクチンパスポート」が中止となった。(この手のワクチンにとって不都合な情報は大きくは報道されない。)欧米でもワクチンへの懐疑が深まってきた。
- ③mRNA ワクチンの副作用による死亡者は日本でも 1,233 例報告された。(2021.10.1 までの累積。厚生省発表) そのほとんどは既往症の無い健常者。症例は、くも膜下出血・

脳内出血・脳梗塞・心筋梗塞であり、血栓や血管系の病気が多い。

- ④新型コロナ感染の重症者も血栓症で亡くなっている。
- ⑤人体には、mRNA を DNA に翻訳する逆転写酵素を持つ「レトロウイルス」が何種類も存在する。もし mRNA ワクチンの逆転写が体内で起これば、転写産物 DNA が人体の DNA に組み込まれる可能性がある。
- ⑥そうすると、上記 5)②、5)④に記載の「血栓の元になる毒蛋白であるスパイク」が、人体で常時合成され続ける可能性がある。この現象による副作用が 2-3 年後に現れる可能性もある。
- ⑦アストラゼネカのワクチンは DNA ワクチンであり、ウイルスの遺伝情報がヒトの遺伝子に組み込まれることによってスパイク蛋白をヒト細胞内で合成する。上記⑥の危険性が元々指摘されていた。実際北欧で試用してみて血栓症の副作用で亡くなる人が多発し、いち早く使用を止めた。(このために余った 8,000 万回分のワクチンが日本の回ってきた。)
- ⑧さらにコロナウイルス用の mRNA ワクチンでは、「抗体依存性感染増強 (ADE)」という固有の免疫暴走が起こる可能性がある。ADE が起こると容易に死に至る。この問題がなかなか解決しないため SERS や MERS のワクチン開発が断念された経緯がある。この現象は猫やフェレットの動物実験で顕著に確認されている。が、一般情報としては流布していない。この問題が真に解決しているか定かではない。(不都合な情報は隠蔽される。)
- ⑨遺伝子試薬である新型コロナワクチンの危険性は海外では良く知られており、特に若年層やこれから妊娠する女性への使用は制限されている。日本では、こういうワクチンの危険性に関する情報提供が積極的には実施されていない。国民は偏った認識を持つに至っている。
- ⑩井上正康氏は、若年層への接種は危険極まりなく「絶対にしてはならない暴挙」と断じている。
- ⑪免疫系にとっては、自然感染による自然免疫が最高の防御態勢であり、ワクチンによる防御は元来脆弱である。

9)欧米で最も成功した国は？：

- ①スウェーデン。
- ②パンデミック騒動の当初から、社会活動を封鎖せず、感染症対策のアドバイスは出すがそれを守るかどうかは、国民個人個人の判断にゆだねるとした。
- ③新型コロナ発生 2 年後の今、各国の状況を比較すると、厳しいロックダウンを断行した欧米各国のどの国と比べても人口 100 万人当りのコロナ関連死亡者数はスウェーデンが最も少なかった。
- ④騒動当初に犠牲者が多く、メディアでは感染対策責任者が相当に叩かれた。しかし、スウェーデンでは 2020 年 6 月に集団免疫が確立したことが分かっている。社会封鎖を行ったどの国よりも早く自然感染による集団免疫が達成されたため、累積被害は低く治まった。

10)日本の事情：

- ①日本を含め東南アジアには土着のコロナウイルス感染症 (4 つの既存コロナウイルス風邪) が存在し、これが毎年掛かる風邪の原因となり、コロナウイルス類に対するある程度の免疫を構築している。(交差免疫力[類似ウイルスに対する免疫力]が有効であった。)
- ②2019 年暮から 2 月にかけて大量の中国人旅行者が来日、無症候性(弱毒性)の武漢ウイルス(新型コロナ弱毒株)が持ち込まれ、多くの日本人が感染しており、第 1 波の感染拡大の時点で或る程度集団免疫が構築されていた。(京大大久保教授仮説。論文あり。)
- ③その後変異株の感染拡大が 5 回に起こり、その都度ピークに達しては終息することを繰り返した。日本人は自然感染による免疫更新を 6 回繰り返したことになる。今現在ワクチンを 6 回打ったのと同じ以上の免疫力を持っていると言える。この背景には、

大多数の無症候感染者の存在があったと考えられる。つまり欧米のような社会的規制は要らなかった。そしてワクチンを打つ必要はなかった。

④ウイルス干渉：

- a)2019年-2020年の冬は、毎年流行するインフルエンザが激減し、2021年冬には絶滅状態になった。
- b)日本では2019年末のインフルエンザが流行する前に新型コロナ弱毒株が上陸し、多くの日本人が新型コロナ弱毒株に無症候感染していたと考えられる。
- c)あるウイルスに感染すると免疫防御態勢が構築される。その防御態勢が、次に来た別の類似ウイルスに対しても免疫力を発揮して感染を起こさない。これを「ウイルス干渉」という。
- d)インフルエンザの激減という現象が、新型コロナ弱毒株への無症候感染の蔓延を間接的に証明している。

■私見：

新型コロナウィルスは弱毒化してもはやインフルエンザ並みないしそれ以下の「普通の風邪」のレベルになったので、指定感染症レベルを5に引き下げさっさと社会的規制を撤廃すべきだと思います。本来なら、日本は上記の事情を勘案して一年以上前に、欧米に先駆けて規制解除できたと思われる。一時「ファクターX」などと言って、日本でのコロナ患者・関連死亡者が少ない理由として何だか謎めいた要因の存在をほのめかす意見がありました。が、「ウイルス干渉」や「交差免疫」というウイルス感染症の基本原則を理解すれば日本固有の事情も説明できることが分かり、腑に落ちた観があります。著者の指摘する「インフォデミック」の災いは計り知れないものがあります。私達は空疎なメディアに頼らず、メディアに騙されず、自力で事態を認識し正しく理解する力を養う必要があるとつくづく思います。著者のインターネット上でのレクチャによれば、コロナ騒動における製薬業界の圧力は相当なものらしく、ワクチンの危険性を示唆するような情報は学術雑誌においてすら排除されることがあるようです。医学雑誌のレフェリーボードがメガファーマの意向に阿るメンバーに牛耳られる状況すらあると言いますから油断なりません。学術論文界でさえ「この論文で誰が得し誰が損するのか」を採択の物差しにする時代になったようです。同じ事は、気候変動関連の研究界でも起こっている。

なお日本より遥かに被害の大きかった諸外国においてもコロナ騒動は終わったという様相であり、未だに（有害無益な）マスクに固執するこの国は異常です。そして日本以外の海外メディアは、コロナの次のネタとしてウクライナ騒動に集中している。日本のメディアは、他国のメディアに追従しているだけです。この切り替えも何だかおかしいと思います。ここでは深入りしませんが…。それでもPCRの数字だけは不思議な律義さで報道し続ける。

皆様のご意見、ご指摘など期待致しております。

【補足】私は、日立在籍中の最後の仕事が「遺伝子検査装置」や「臨床検査装置」関連でした。このため必要があって生命科学・遺伝子工学・臨床検査・感染症に関する学会に入学しこの分野を独学してきました。専門の知識・技術におきまして医学者には勝てませんが、生命科学の基本はある程度弁えているつもりです。また専門の医者ではないので、医学界や製薬業界に一切の利害関係もございません。自分の健康を自力で守るために、この分野も学び続けております。素人が偏りのない眼差しで調べ、学び考察する以外に生き延びる手立てはないと思います。

以上